

九月十日

菅原道真

去年の今夜清涼侍す
恩賜の御衣今此に在り

秋思の詩篇独り断腸
捧持して毎日余香を拜す

【作者】菅原道真(八四五〜九〇三年)平安初期の政治家・学者・漢詩人・歌人。学者の家系に育つたこともあつて教養・人格ともに優れ、若くして政府の要職を経て五十五歳で右大臣についた。しかし異例の出世で藤原一族からねたまれ、それがもとで九州太宰府に流され、その地で亡くなつた。五十九歳。死後、罪を許され、正二位まで復権した。世の人々はその高潔さを敬い、京都の「北野天満宮」をはじめ全国に天神様の名で社を設け、学問の神様として今なお慕い続けている。

【語釈】*九月十日…延喜元年(九〇一年)の九月十日。 *去年今夜…昌泰3年(九〇〇年)の九月十日。 *清涼…清涼殿 天皇が日常生活を送られる場所。 *秋思詩篇…「秋思」の御題(ぎよだい)。「秋思詩」を指す。 *断腸…胸も張り裂けんばかりの悲しい思い

*恩賜…天皇からいただいた。 *余香…御衣に焚きこめた香(こう)の残り香

【通釈】去年の今夜、私は重陽(ちようよう)の菊の節句の宴(うたげ)に招かれ、清涼殿で醍醐天皇のそば近くにお仕えしていた。その夜、帝(みかど)から戴いたお題「秋思」に対する私の一編は、昔と今のあまりにも大きな変化に堪えられず、悲しい思いをこめて詠んだものであった。それにもかかわらずお褒めを戴き、その時に賜わつた御衣が手もとに今こうして置かれている。私は、それを毎日おし戴いては、残り香を懐かしんでいる。

【鑑賞】醍醐天皇に対する この詩は、延喜元年(901)9月10日の夜、道真が九州太宰府(今の福岡県太宰府市)に流された時の作です。前年の菊花の宴に招かれて「秋思詩」を作り、今は藤原一族からねたまれて冤罪(えんざい)罪なきつみを蒙り、都を遠く離れていても帝の厚い恩徳に感動しているのです。